

## 1. あなたの病気(腎細胞癌)について

腎細胞癌とは血液を濾過して尿を作る腎臓という臓器に発生する癌で、40歳代から70歳代に多く発症します。男女比はおよそ2:1です。血尿やお腹の違和感で見つかることもあります。深い所にある臓器なのでなかなか症状が出にくく、症状が出てくる段階では他の臓器へ転移している場合も少なくありません。最近では人間ドックや癌検診などで行われている超音波検査で偶然発見される患者さんが増えてきています。

## 2. あなたの病気(腎細胞癌)の治療法について

### (1) 現在行われている治療法

腎細胞癌の特徴は、他の癌で一般的に使われる抗癌剤などのお薬や放射線があまり効かないという事です。したがって手術で完全に摘出する事がたいへん重要です。しかし、発見が遅れた場合などのいわゆる進行した状態になると、多くの場合、周囲に広がっていくと同時に、リンパ節、肺、骨、肝臓などへ転移を起こしてきます。転移病巣が単発の場合、原発病巣(腎臓の腫瘍)および転移病巣を手術で完全に摘除できた場合の術後5年目の生存率は約30%と報告されており、転移病巣への手術の効果もある程度期待できます。また、転移病巣への手術は、骨転移病巣による神経圧迫などの、転移病巣が原因で生じている自覚症状の軽減を図ることは期待できます。しかしながら、転移病巣が多発している場合には、転移病巣への手術を行っても患者さんの予後が明らかに改善するという報告はありません。手術で取りきれないものや、転移してしまったものに対しては、インターフェロン、インターロイキンなどのサイトカインと呼ばれる蛋白を利用した薬物治療が行われています。これらのサイトカインを用いた薬物治療は患者さんの免疫力を高めることによって、癌を攻撃するので、免疫療法と呼ばれています。10~20%の患者さんはこの治療によって、癌が縮小するといわれていますが、残念ながら残りの8割程度の患者さんには効果がありません。また、この治療によって一時的に癌が小さくなくても、やがて大きくなっていく場合がほとんどです。なお、インターフェロン、インターロイキンなどのサイトカインが腎細胞癌の転移病巣の治療として使用されるようになる以前は、女性ホルモンの一種である黄体ホルモンが腎細胞癌に対する薬物治療として使用されていました。腎細胞癌に対するインターフェロンの効果を判定するために、インターフェロンと黄体ホルモンのそれぞれの効果を比較する臨床試験が海外で行われ、生存期間の延長については、中央値で8.5ヶ月と6.0ヶ月と、インターフェロンの方が長かったと報告されています。また、インターロイキンとインターフェロンが生存期間の延長に及ぼす効果は、ほぼ同等であると報告されています。近年、ソラフェニブ、スニチニブなどの分子標的治療薬が転移のある腎細胞癌の患者さんの治療に用いられるようになりました。これらの薬は、複数の酵素(分子)を選択的に阻害することにより、癌細胞の増殖とその栄養血管の増殖を抑える作用を持っています。これまでに海外で第Ⅲ相臨床試験が、国内で第Ⅱ相臨床試験が行われました。転移に対する治療がこれまでに行われていない腎細胞癌の患者さんを対象にスニチニブとインターフェロンαを比較した海外の第Ⅲ相臨床試験では、インターフェロンαによる腫瘍縮小効果が6%の患者さんに認められ、これまでに報告されているよりもやや低い効果でした。これに対して、スニチニブで